
バッティングセンターの主

白石のっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バッティングセンターの主

【Nコード】

N0529D

【作者名】

白石のっち

【あらすじ】

友人に連れられて行ったバッティングセンター、そこには芯のぶれない力強いフォームで鋭い打球を飛ばす主がいた。

私がバッティングセンターに行くと、いつもそこには主がいる。

主との出会いは人に連れられて初めてバッティングセンターにやってきた時。芯のぶれない力強いフォームで何度もボールを打ち返す主の姿は格好良く、運動音痴の私にはとても輝いて見えた。

私も主みたいにボールを遠くへ飛ばしたい。私はそれから週に1、2回のペースでバッティングセンターに通うようになり、その結果今では7割近くバットがボールに当たるようになった。

強い打球を飛ばすには思い切ったスイングが大事だ。球を恐れずに、球に一步も引かずに攻めないといけない。どちらかといえば大人しく、それまで引つ込み思案だった私がいつの間にか実生活でも自ら人を積極的に引つ張り、強く行動するようになった。これも私をバッティングに導いてくれた主のおかげだと思っている。

だが今日は主の様子が違った。いつもは最低でも80球は打ち込む主が、今日に限ってはその半分以上しか打たずバットを置いてボックスを出してしまったのだ。

主は受付で店長のおじさんと何か話し、最後にお辞儀をすると外へと出てしまう。

主に何があったのか、ボックスにいた私は居ても立っても居られずバットを仕舞うのも忘れて店長の所へと走った。

「ああ彼ね、なんか引つ越すみたいで最後に挨拶をしてたんだよ」

このバッティングセンターの主がいなくなってしまう。私は店長にお礼を言うとすぐさま主を追いかけた。

「あの、はじめまして」

外に出ると幸いにも主はすぐそこにいた、当たり前だが主は不思議な顔で私を見ている。何とか一言だけでもお礼を伝えたいが主の視線が気まずく、私は言葉が続かない。

「ああ……はじめまして」

主は軽く会釈して行ってしまった。主と初めて喋るのがこんなに緊張するなんて。

でもこのままじゃいけない、ボールを打つには思い切りが必要なんだから。

「実は私、ずっとあなたに憧れていたんです」

そのまま私はボックスから持ってきてしまったバットを主に手渡す。

「だから、バッティングを教えてくださいませんか」

無我夢中で言葉が出た。バットを持って自分を追いかける女性の必死な姿が面白かったのか、主は思わず笑い出してしまう。

「君かわいいね。別に教えてもいいよ」

笑いながら、それでも少し嬉しそうに主はバットを受け取ってくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0529d/>

バッティングセンターの主

2011年1月25日08時10分発行